研究ノート

# チンギス･カンの前半生　その 10

－チンギス・カンの誕生－

# Former half-life of Chinggis Qan　No.10

－The Birth of Chinggis Qan－

2020 年 11 月 23 日

Nov.23,2020

安田公男

Kimio Yasuda

URL : chinggis-ff

## はじめに

テムジンは苦闘の末、ケレイト部族の長オン・カンを倒した。千数百キロメートルにもなる苦難の逃走の末に成し遂げられたその結果は、ケレイト部族の者達さえ感嘆するしかないものだった。小さいモンゴル部族が大きなケレイト部族を吸収した。妻の里方であるコンギラト部族とは既に強く結ばれていた。強大になったその力に危機を覚えたナイマン部族のタヤン･カンが向かってきた。この最後の試練に打ち勝って、テムジンは全遊牧種族の君主であるチンギス・カンとなる。

## 1　ナイマン部族との戦い

――1203 年の冬、オン・カンを下しケレイト部族を収めたテムジンは根拠地アブジア・コデゲリに帰った。この年数え 42 歳であった。この事を知ったナイマン部族のタヤン・カンはテムジンを討つと決め、使者トルビ・タシを遣ってオングト部のアラクシ・ディギト・クリに助力するように説いた。翌 1204 年の春先、テムジンがラクダが原のトルキン・チェウドで巻き狩りをしていると、

オングト部の使者ユクナンがやって来てナイマンの攻撃計画を知らせ、オングト部はタヤン・カンに味方しないと伝えた。狩りを中断して討議すると、春先で馬が痩せているので出陣は秋にしようとの意見が大勢を占めた。だが、テムジンの弟のテムゲとベルグタイが直ぐに出兵すべきであるとの強硬な意見を出し、テムジンも賛成した。1204 年の夏の初めの月の望月の日に祭りを行い、戦勝を祈願して、ジェベ、クビライを先鋒隊として行かせた。本格的出兵は秋になり、カルカ川のオル河曲のケルテゲイ崖で再会して陣を構えた。――

親征録・集史では、タヤン・カンが出した使者名とアラクシ・デキト・クリが出した使者名が秘史と逆になっているが、秘史の方が正しいようである。そのほかは大筋で同じである。

### 1.1　ナイマン部族

タヤン・カン、本名タイ・ブカが治めていたナイマン部族はアルタイ山脈に居たと言うから、現在のホブド県、オブス県、バヤン・オルギー県辺りを本拠地としていたと思われる。アルタイ山脈からの水の恵みで、現在でも比較的人口の多い地方である。もう一つブイルク・カンの率いるナイマン部族がハンガイ山脈の西南麓、現在のバヤンホンゴル県やゴビアルタイ県辺りに居たが、既に 1199 年にモンゴルとケレイト連合軍に侵攻され、1202 年のクイテンの戦いでは大敗北を喫して弱体化していた。二人は兄弟であったが極めて仲が悪く、互いに助け合う気持ちはなかった。この部族は昔の高原地帯を支配していたトルコ系の突厥や回鶻の末裔と思われる。当時トルコ系の国としては、アルタイ山脈を西に越えた今のウルムチ地方に天山ウイグル国があった。更に今のキルギス地方には契丹族が征服して建てた西遼国があったが、現地民はトルコ系であり、天山ウイグル国を支配下に置いていた。このようにトルコ語を話す住民はアルタイ山の西に大きく広がっていたが、相互の連携は弱かったようである。タヤン・カンもこれらの国を引き込んで戦力を高めようとしていたような形跡がない。メルキトとナイマンの連帯が強かったのは、歴史的にウイグルに属していたからでもあろうが、多分ナイマン部族との商業的なつながりが大きかったのではなかろうか。ただし、民族的にはモンゴル系に近かったようだ。

秘史には、コリ・スベチという辺将が殺したオン・カンの首がタヤン・カンの元に持って来られたので手厚く祭ったが、死首が笑ったとしてタヤン・カンが砕いてしまったとある。又、彼が狩猟と鷹狩りにうつつを抜かしているともされている。このように、器量が小さく軍事能力にも欠けているように書かれているが、モンゴル側の記録しか残っていないので過小評価されている可能性がある。ただし、将軍クラスには、コクセク・サブラクのようにブイルク救援にも赴いたような気骨のある将軍がいたし、この後の戦いでも奮戦した将兵は多く居たようである。。

### 1.2　新モンゴル部族の組織編成

秘史では、テムジンがカルカ川に陣を構えた時に千戸、百戸、十戸の責任者や侍従らを決めたとある。従来のモンゴル部族のままであれば、わざわざこのようなことを記述する必要はない。旧ケレイト部族や旧コンギラト部族などを加えて拡大したモンゴル部族の組織を再編成したものと考え

られる。だが、戦いを直前にして組織変更をするはずがなく、事前に組織を決めて有効であることを確認していたはずだ。それが軍事訓練の意味合いが強い巻き狩りの場であったと考えられる。テムジンの号令一下新モンゴル部族が行動出来るようにしていたのだろう。親征録では、カルカ川に陣を構えた時に再会したとある。旧モンゴル部族だけなら再会の言葉は不必要である。旧諸族が春以来再び会ったからそのように書かれたのであろう。だが、この戦い以降再会の言葉は必要なくなる。全てがモンゴル部族の意識になるからだ。

### 1.3　テムゲとベルグテイの強気発言

オングト部がナイマンの侵攻計画を伝えてきたので狩りを中断して対応を討議した時、テムゲとベルグテイは直ぐに出兵すべきであるとの強硬な意見を述べ、テムジンも賛成した。冬を越して馬は痩せているから春に出陣するのは彼らも無理と分かっている。状況はナイマンも同じようなものだから春に兵を出してくるはずがない。夏としても半ば以降のはずだ。それにもかかわらずこのような意見を述べたのは、大きくなった新モンゴル部族の指導者層が弱気でいてはならないとの思いからだろう。絶対にナイマンを討つのだとの強い気持ちを新たに加わった者達に伝える目的が大きかったのに違いない。夏の初めに出陣の祭りを行っているから、狩りが終わって少ししてからだ。ジェベ､クビライを先発させたのは単に強気発言からではなく､敵への偵察と挑発が目的であった。

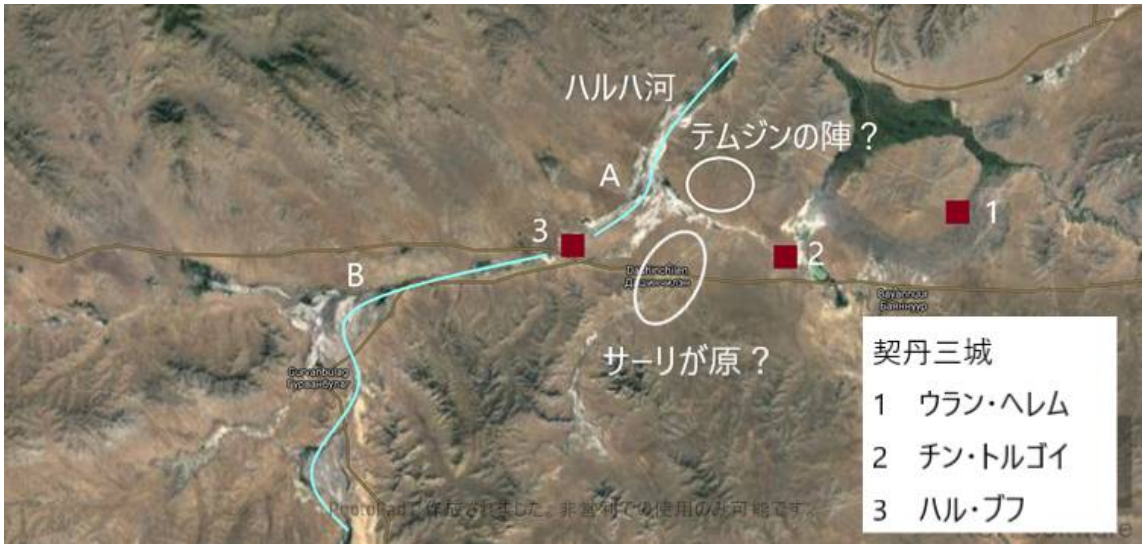
### 1.4　ラクダが原のトルキン・チウド

ラクダはゴビ地帯に多いので、南のゴビ地方と通じる街道沿いにあり、かつモンゴル領、ケレイト領から行きやすい場所で、コンギラト部族も来やすくてはならない。こう考えて地図を見ると、現在のバガ・ハンガイ 47.35N107.49E からチョイル 46.34N108.38E あたりが候補になる。トオリルがカラ・キタイから困窮して帰ってきた時に到着したグセウル湖を、現在のウンビイン・ツァガン湖と想定したが、その辺りではなかろうか。トルキン・チウドはトルキン河の河尻と訳せるようだ｡湖の北西 10km にはバガ･ハンガイ方面から流れて来る細い河が干上がって終わっているので、そこであろう。ここはサインシャンドを経てオングト部の居る現ウランチャップにも直結している地である。

### 1.5　カルカ川のオル河曲のケルテゲイ崖

この場合のカルカ（ハルハ）河は、図 1 の空色で示した河である。契丹三城の一つ、ハル・ブフが河近くにある。オル河曲がどこか分からないが、A と B で曲がりが大きく、支流又は分流とみられる流れがある。恐らく A がオル河曲で、その東北の低い台地のような山並みの南斜面がケルテゲイ崖ではなかろうか。そこから南へ広がるなだらかな傾斜地には井戸らしき黒い点がいくつも見えるので、軍が駐屯する場所にふさわしい。契丹三城のチン・トルゴイやウラン・ヘレムが近くにあるので、クイテンの戦いの時と同じように、輜重（家族）を避難させていた可能性がある。

図１　戦役前のモンゴル軍の駐屯地




### 1.6　戦いの様相

――ジェベ、クビライの二人がサーリ原に着いてみると、カンカル・カン山には既にナイマンの哨戒兵がいた。小競り合いが起き、モンゴル側の馬が逃げて敵陣に入ってしまった。その馬は痩せて鞍は粗末であった。その後テムジン本隊もサーリ原に到着し陣を敷いた。旧ケレイト勢、旧コンギラト勢も加わり全勢力が揃い、駐屯して馬体の充実を図った。ナイマンの哨戒兵は、馬が痩せて鞍が粗末であることと敵の数が思ったより多いとの情報を、ハンガイ地方のカチル水にいたタヤン・カンに告げた。「それなら我々は徐々に引き下がって、追撃してくる彼らを引き込んで弱らせた後で攻勢に移ろう」とタヤン・カンは考えを述べた。これを聞いた息子のグチュルクは、「父は女のように怖じ気づいたのか」となじった。又、将軍コリ・スベチは、「あなたの父イナンチ・カンは敵に背を向けるような人ではなかった。怖じ気付いたのなら、あなたの妻（母）のグルベスでも連れてきて指揮させたら良かろう」とタヤンに言って場を離れた。こう言われて、さすがにタヤン・カンも怒り、「お前等がそこまで言うなら戦うぞ」と言い、カチル水からタミル河に移動し、オルホン河を渡り、ナクゥの崖の東寄りの麓を経てチャキルマウドに着いた。この時、メルキト族のトクトア・ベキ、ケレイト部族のアリン・タイシ、オイラト部族のクドカ・ベキ、ジャムカのジャジラト、ドルベン、タタル、カタギン、サルジウトなどの諸族も共に進軍していた。モンゴル軍は、テムジン自ら先鋒となり、カサルが中軍を指揮し、テムゲが後方で替え馬を管理した。両軍近づいて来た時、モンゴル方を偵察したジャムカは勝てないと察し、タヤン・カンの元から逃げた。ナクゥ崖の南辺りで戦いが始まった。激戦となったが、日暮れ近くになってモンゴル軍の優勢がはっきりした。タヤン・カンは重傷を負っていたので、コリ・スベチらの近侍する戦士達は彼を励まし、山に登って陣を立て直そうと彼に言ったが衰弱する一方だった。コリ・スベチらは観念してモンゴル軍に突進し、これが最後と戦った。その忠誠心と奮戦振りに感銘を受けたテムジンは、なんとか彼らを生かして捕らえたいと思ったが全員戦死した。タヤン・カンを追いつめて捕らえた。モンゴル軍はナク

ゥの崖の山の前に陣取って夜を過ごした。夜の内に崖を越えて逃げようとしたナイマン兵は崖から転び落ちて多く死んだ。グチュルクは逃げてタミル河に居たので襲うと更に逃げた。ジャムカと行動を共にしてきたドルベン以下の諸族は投降した。グルベスも投降した。――

親征録にはジャア・ガンボがナイマンに従軍しているとしている。だが他書にはないし、テムジンとの強いつながりからして考えられない。一時彼がナイマンに逃げた記事から想像して書いていると思われる。秘史はジャムカがタヤン・カンを脅し怖がらせて後退させたように描いているが信じ難い。集史の記述が実情に近いと思う。

### 1.7　サーリ原

テムジン本領にもサーリ原があり、ケルレン河に近い 47.37N108.07E 付近である。ここに出てくるサーリ原はカルカ河の近くにあった別の原であろう。地図で見るところ、現在のダシンチレンの町付近のように思える。南から北北東方向に長く伸びる浅い谷のような地形が双方よく似ているところから判断する。戦場はここからさほど遠くない場所にあるはずである。

### 1.8　両軍の力

タヤン・カンの住んでいたのを現在のホブドと考えると、そこから出発してウブス湖の南、タミル河を経て、オルホン河を渡っているのだから、移動距離 1,300km を越える。モンゴル本軍の移動距離は本拠地（現アバルガ・トソン）から計算して 500km 足らずである。ナイマン側は約三倍の距離を移動しているのだから、この戦いに掛ける意気込みがうかがえる。

モンゴル側は旧ケレイト領の西で敵を迎え撃つ体勢、即ち防御的である。春のテムゲやベルグテイの言葉にもかかわらず、敵領に迫る力はなかったのだ。春の狩りの時にも馬が痩せているとの言葉が出ているし、親征録にはその時、畜牧疾疫の言葉がある。サーリが原に着いても馬を太らそうとの言葉もあるから、冬の大雪か何かでモンゴル側の状況は良くなかったのだろう。

秘史には、モンゴル軍が夜にかがり火を多く焚いて勢力を多く見せかけたとの記述がある。しかし、昼になれば実態は分かるのだからありえない話である。秘史の書きぶりだと旧モンゴル軍の姿しか思い浮かばないが、旧ケレイト軍や旧コンギラト軍がこの戦いに加わっていたはずだ。遊牧民族の覇権を掛けた最後の戦いと言って良いこの戦いに加わらずに傍観していたら、これ以後のチンギス・カン政権で存続できたはずがない。彼らが集結して数が増えていたことを、多くのかがり火として象徴的に書いていると理解したい。その数に対抗できるだけの兵を動員できていたのだからナイマンは大きかったのだろう。実際、昔エルケ・カラがイナンチャ・ビルゲ・カンの後ろ盾でトオリルからケレイトの実権を奪っていたほどであった。この戦い以後彼らの名が消えるところを見ると、ナイマン勢は本領が空になるほど動員していたように思われ、必死であったようだ。

メルキト部族のトクトア、オイラト部族のクドカ・ベキもナイマン勢に加わっていたが、クイテンの戦いの損耗が大きかったので、兵数は少なかっただろう。

### 1.9　カンカル・カン山

ペルレーはハンガイ山脈の一支脈ハンハル山に比定しているが、オルホン河より西の地点であるのでサーリ原地域から望見できるような位置ではない。東西に延びる街道の近くにあり、東からやってくるモンゴル軍を見張れる位置のはずだ。そう考えて目立つ山を探すと、モゴド(Mogod)山 48.1N103.2E、2139m が街道の北にある。これかとも思うが、サーリ原から 50km 以上離れていて、監視の役目を果たしたのか疑問が残る。もっと近くにも山は多くあるが名が分からない。

### 1.10　カチル水

ナイマン軍はこの川を渡ってからタミル河を経てオルホン河を渡っている。タミル河は北緯 47.8°付近を東西に流れる河で、東経 102.5°付近を南北に流れるのがオルホン河である。恐らくナイマン軍はハイルハン郡 48.61N101.95E を流れる河を南に下り、タミル河の中程にあるバトツェンゲル郡に出て、河の北岸沿いに東に進んでからオルホン河を渡ったのだろう。通行痕からこのように判断した。そうすると、ハイルハン郡を南北に流れる河がカチル水ではなかろうか。地図を見るとフヌイ(Hunuy)河と言うようである。

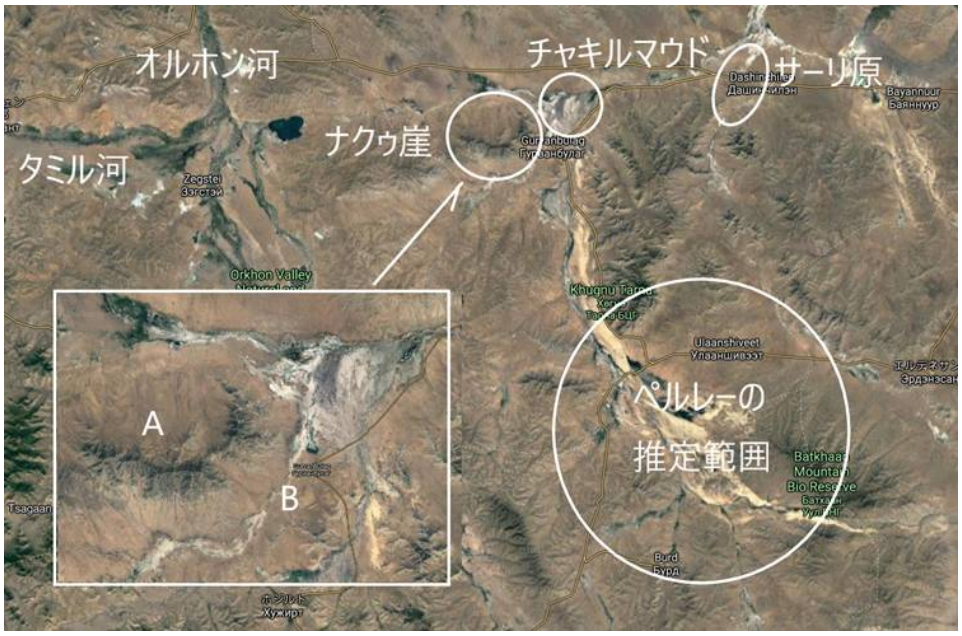
### 1.11　チャキルマウド

チャキルマウドとは蘭草の一種チャキルマが多く生えた土地のことらしいが情報がない。ネットの情報では、現在モンゴルの国の花はセイヨウマツムシソウになっている。全土に分布し、夏の 3 ヶ月間美しい花を咲かせ、病気にも強く、厳しい環境にも耐えるとある。また、戦争のない、平和な象徴として「祭壇の花」と名づけてきた歴史があり、鞍飾り花(バーワル・ツェツェグ)の別名もあるらしい(1)。これは蘭科ではないようだが、草原に咲く花のようなので、この戦場にも咲いていたと想像したい。

### 1.12　ナクゥの崖

ペルレーはこの崖をラク・バヤン山 47N104E と推定している。ダシンチレンの南になるが、位置が良く分からない。また、その辺りからサーリ原にいるモンゴル軍を攻めるとなると、地形的にかなり南から迂回してくるような行軍路になる。地理に充分通じていない土地で、そのような行動を取るとは考えられない。ナイマンはタミル河沿いにオルホン河を越えて進軍してきたのだから、そこからサーリ原に真っ直ぐに通じている道を進むはずだ。この道の中間付近をまず見ていかなければならない。秘史にはジャムカがタヤン・カンを脅して、チャキルマウドからナイマン軍を山の上に引かせたように書かれているが、これも創作であろう。実際はチャキルマウドが戦場として良くないとナイマン軍は判断して一旦下がり、陣をひくのに適したナクゥ崖に移動したのだろう。であれば、南の山裾はナイマン軍が配置できるほど長い地形で小高い丘になっており、前は開けた草原になっていると考えられる。このような観点で戦場を探した結果、現グルバン・ブラグ付近に候補地を見いだした。図 2 に示す。

図 2　ナクゥ崖と戦場




図中の半円形をした黒く見える山はかなり傾斜が急である。これがナクゥ山（崖）であろう。その直ぐ東に広がる白っぽい土地はカルカ河が滞留して塩地になっているのだろう。足場が悪そうなので､チャキルマウドはここと推定する｡恐らくナイマン軍はウギー湖方面から真っ直ぐ東に進み、ナクゥ山の北東を過ぎた辺りでチャキルマウドの向こうにモンゴル軍を認めた。そのまま進むと足場が悪く戦闘に向いていないので、少し後退してナクゥ崖を背に負って布陣し、モンゴル軍を待ち受けたのではなかろうか。事前の偵察で、ここを本陣候補と決めていたはずだ。ただ崖の南の地としては二通りの解釈が出来る。崖の北東部から見て南となる A 地点と、崖のある山全体の南と考えた B 以南である。だが、A の方が太陽を背にして敵の動きがよく見え、東と南から攻撃される恐れもない。モンゴル軍をチャキルマウドから続く足場の悪い土地に誘い込め、高地から駆け下れば突撃力も増す。戦術面から良い地形であるので、ナイマン軍は A 地点に展開して北から向かってくるモンゴル軍を待ち受けたと判断する。

### 1.13　戦いの結果

チャキルマウドは幅 13km 位の範囲に広がっている。部隊の移動と布陣の時間を考えると、恐らく戦いは正午前頃に始まったのではなかろうか。夕暮れが近づいてきた頃にモンゴル軍の勝利が確定した。半日近く戦ったのだから激戦であった。集史はタヤン・カンが戦いの終わり頃に重傷を負っていたとする。ということは、決して秘史の伝えるような軟弱な君主ではなく、テムジンと同じく前線に居て、兵を指揮し鼓舞していたのだ。だからこそ、近侍するコリ・スベチ等の将軍も運命を共にしようとしたのだろう。秘史は脚色が過ぎ、集史の記述が実際に近いと思う。モンゴル軍が勝利したのは、10 年近く部族間の争いを続けていたので、戦いに慣れていたことが大いだろう。夜の間にナイマンの生存将兵はナクゥ崖を越えて逃げようとしたが転び落ちて多く死んだとある。衝

立のような山は守りには役立ったが、逃げるときは障害になった訳である。

タヤンの息子のグチュルクは戦場から脱出し、タミル河を経て叔父のブイルク・カンの元に逃れた。1199 年、テムジンとオン・カンがブイルクを攻めたときに用いた経路を辿ったであろう。メルキト部族のトクトア、オイラト部族のクドカ・ベキは領国に逃げた。

ジャムカは戦いの前に逃亡し、見捨てられた格好のサルジュート以下の東方諸族は翌日投降した。ジャムカをグル・カンに推戴していた彼らは、その称号から推察してカラ・キタイとの間に強いつながりがあったとする説がある。だが、本当に連携があったのなら、ここで投降せずにグチュルクと共にカラ・キタイまで逃げただろう。彼らがここでテムジンへの反抗を断念したということは、その生きる世界が現モンゴル圏以外に念頭になかった証拠である。カラ・キタイとの連携があったとは考えにくい。

タヤン・カンの妻グルベスも投降してきたので、テムジンはかつて彼女がモンゴルを馬鹿にしていたことをなじった後、娶ったとある。要するに慰みものにしたのだが、グルベスは自分の身を投げて、生存した将兵やその家族の命乞いをしたのだと理解しておこう。

### 1.14　タヤン・カンのナイマン領の接収

メルキト領の平定は次に述べられているが、タヤン・カンのナイマン領の接収についてはどの史書も触れていない。カンが戦死し有力な将軍も死んでしまった。息子のグチュルクさえ本領のアルタイ地方には逃げず、叔父のブイルク・カンを頼っている。ということは、今回の戦いでタヤン・カンのナイマン部族は壊滅してしまい、本領に残っていた部民には抵抗できるような勢力がなかったのだろう。従って、戦力はそれほど必要としないので、メルキト作戦と平行してモンゴル部族の誰かがアルタイ地方に行き、接収作業をしていたはずだ。ベルグテイはメルキト戦に出ている。末弟のテムゲが本領に残っていたとすれば、カサルが兄の名代として行ったのであろうか。

## 2. メルキト領を制圧

――ナイマン部族を打ち破った年の冬、モンゴル軍はメルキト領に侵攻した。カラ河とダル河の水源でトクトアを敗走させた。ラクダが原（秘史はサーリが原）でその部民と国土を収めた。コアス・メルキト族のダイル・ウスンが娘のクランを差し出して来て、彼らは馬も家畜もあまり持っていないので従軍を許して欲しいと言った。そこでテムジンは彼らを編成し直して立ち去ると、彼らは又反乱し荷物を奪ったので、残していた兵達が奪い返した。テムジンはタイカル塞でメルキト諸部を下して帰還した。トクトアは子供達とブイルク・カンの元に逃れて行った。ダイル・ウスンの部衆はセレンガ河近くのカラウン･カプチャル塞に立て籠もったので､ボロクルとチンバイが制圧した。――

### 2.1　カラ河とダル河の水源

二つの河は地図で探せないので小さな河であり、河上が極めて接近しているのだろう。メルキトの中心地はキャフタ（モンゴル名ヒャグト）なので先ずそこを見ると、市の中心を南に流れてモンゴル国内に入る河がある。現在キャフタ河と言うようだ。また、市街地の直ぐ北には北に向かう流れがあって、ウスチ・キャフタでセレンガ河に合流している（3 参照）。2 つの河は 6km ほどしか離れていないので、現キャフタ地域がカラ河とダル河の水源と呼ばれた土地と想像する。そこに居たトクトア親子を追い払ったのだろう。他の土地ではそれらしい河が見つからない。

### 2.2　ラクダが原

秘史はメルキトのサーリが原となっているが、104 節以降のメルキト領侵攻作戦では、トクトアの居たところをラクダが原としている。親征録もラクダが原である。地形の特徴から考えると、図 2 の A と B の二つがラクダが原の候補である。キャフタに近い A かとも思えるが、秘史 104 節以降の記事では、キルコ河を渡ってそこに着いており、河の魚取り、貂取りがトクトアに知らせたとある。現ヒロク河がキルコ河なので、平原中央を流れる A よりも、河に沿って進み、それを渡って入っていく B の地形がラクダが原に合致する。

図 3　メルキト領の地形

### 2.3　タイカル塞とカラウン・カプチャル塞

この二つについては具体的な地点を決める手掛かりがない。ただ、カラウン・カプチャル塞についてセレンガ河付近としているが、その辺りはモンゴル軍が制圧していたはずである。親征録にはカラウンの狭間に塞を作ったとしている。カラウンの狭間はチコイ河に進む道なので、そこに至る道の途上に塞はあった考える。

### 2.4　トクトア父子逃亡路

トクトア親子はこの後ブイルク･カンの元に逃亡している。オイラト部族を伴っていたことから、彼らはバイカル湖の南に逃げてそこで彼らと合流し、現モンゴルのホブスゴル湖の東側を抜けてブイルク領に向かったのではなかろうか。

### 2.5　クラン

ダイル・ウスンは自分の娘クランを捧げた。嫁に行く前だったらしいので 15 歳くらいか。西域征服にも后妃の中で唯一同行しているのは、若さに加え献身的な女でもあったのだろう。ただ、父親は間もなく反乱しているので、何のために娘を捧げたのか分からない。

### 2.6　秘史の創作部分

秘史の 104 節から 115 節には、テムジンがメルキトに奪われた妻の救出のために、オン・カン、ジャムカの三人でメルキト領内に華々しく討ち入る様子が描かれている。しかし、戦いの中でのテムジンとボルテの再会などあり得ず全くの創作である。今回の戦役で似たような話があったので、それを参考に、20 数年前に遡らせて秘史は書いているのであろう。だが、ベルグテイが 20 数年前に連れ去られた母を探している様子は、この戦役のこととしても不思議ではない。「わが子らが王者となったと言われましたが、ここで悪しき人に心迷うて、今、己が子の顔をどうして見られましょう」といって密林に逃げ込んだとある。わが子らが王者となったのは、まさしく今回の戦役のことだから言葉に信憑性がある。母はメルキト人との夫婦生活になじんだ身を恥じて隠れたようだようだが、この話が残っていると言うことは、再会があったとして不思議では無い。秘史のこの部分に出てくる地名は数多いが考証はしない。

## 3. 西夏へ侵攻する

――1205 年、テムジンは西夏国に侵攻し、リキリ塞を下した。落思（ルシ？）城を経て、多くの人民、家畜、ラクダを得て帰った。――

### 3.1　侵攻目的と結果

西夏は中国の寧夏回族自治区、甘粛省を中心とした地域にあったチベット系民族の国であった。黄河が大きく北に湾曲している地域の西、即ち河西回廊にあった。祁連山脈の北に沿って西に延びて酒泉市を越え敦煌辺りまでを勢力圏とし東西交易で栄えていた。首都は興慶、現在の銀川市である。区分けに西夏区、興慶区の名がある。だが、ブイルク・カン領のナイマン部族はまだ余喘を保っており、テムジンの遊牧部族統一戦争は終わっていなかった。それを後回しにしても先ず西夏を攻めたのには、ラクダ確保の目的が大きかったであろう。以前、オン・カンと共にハンガイ山脈の北回りでナイマンを攻めたときは、南の砂漠方面にブイルクを取り逃がしていた。同じよう

に攻めると、ブイルクが西夏方面に逃げ出す可能性があった。今回は山脈の南回り方面からも攻めようとしていたのだろう。オンギ河を越えるその経路は水が乏しいことが知られているので、多量のラクダを必要としていたはずだ。これが、統一戦争を後回しにしても西夏を攻めた理由であると考える。また、西夏は近くて国力も大きすぎず、攻める国として手頃であり、金国も刺激しなかったからであろう。農業地帯に城郭を構えている相手への攻撃方法も学ぶことができる。人民も多く連れて帰ったとあるが、その多くは農民であろう。モンゴル本土で黍などの栽培をさせて食料を補充する目的が大きかっただろう。他にも井戸掘りや、道路開削などの土木作業に使役しただろう。

### 3.2　侵攻路

モンゴルの北部から西夏に進もうとすると、中央部はアラシャン砂漠に阻まれている。侵攻路は、現在の巴彦ノール市方面に向かう東ルートと、有名なエチナ路、即ち現在の額済納旗を経て酒泉市に至る西ルートの二つがある。だが西ルートの途中はブイルクのナイマン領の東を通る。力が弱っていたとはいえ、襲われる恐れなしとしない。また、そこに進んでいれば、有名なエチナの名が記録に残るはずだが無い。と言うことは、行路に問題の無い東ルート（図 3A）を選んだはずだ。親征録、元史は力吉里（裏）塞、落思を攻めたとし、集史はリブルキ塞、コリン・ルシとする。多分同一地名なのだろうが、これらを現在の地名と比較した資料を見ない。中国の地図を見ると巴彦淖尓（バヤン・ノール）市の北に兀剌孩（ウラハイ）城という西夏時代の堡塁が記されている。だが、元史にはここを 1209 年に攻めたとあるので、その北方の地域を攻めたのだろう。落思は現在の烏拉特中旗 41.59N108.51E であろうか。力吉里（裏）塞はそこまでのどこかであろう。西夏攻撃としては、チョイ辺り程度の規模である。

図 4　モンゴルから西夏への攻撃路

## 4　チンギス・カンの誕生

――1206 年春、テムジン数えで 45 歳。オノン河源に九脚の白いトゥク（旗指物）をたなびかせ、諸王百官を集めクリルタイを開いた。コンゴタン氏のムンリク・エチゲの子、テプ・テンゲリことココチュがチンギス・カンの称号を奉った。この年、ナイマンに向けて兵を発した。ブイルク・カンはウルク・タクのソゴク水で猟をしていたが、侵攻されているのを知らず捕らえられた。先の戦いで逃げ込んでいたタヤン・カンの息子のグチュルクとメルキトのトクトア達はイルティシュ地方に逃げた。――

### 4.1　チンギスの意味

チンギスの語源には種々の説がある。光の精霊、大きな海。グル・カンのグルと同じくチンは強大の意味でチンギスはその複数（集史）。現在のモンゴル人は大海の意味と考えるようだ。決定論は無いが、それら全部を含んでいるように思える。従来は大王の意味として、トルコ語起源のグル・カンを用いてきたが、トオリルの叔父やジャムカが名乗って印象が悪くなっていた。それとは異なる清新な称号を必要としたのだろう。

称号を奉ったのはコンゴタン氏のココチュことテプ・テンゲリであった。彼一人で考えたというより、彼の父、ムンリクとも相談しながら、テムジンの事前の了解も得ての名称決定であろう。巫術の家系である彼が称号を奉ったのは、この名称は天から降りてきたものだとの箔をつけたのであろう。大王の一般名称として考えられたのだろうが、初代の事蹟が偉大すぎて後世の誰も名乗れなくなり、固有名称になってしまった。ムンリクはケレイトとの争いの初期に適切な助言をテムジンに与えて危機を救っていたから、彼の名でこの名称を奉ったとしても不思議ではない。だが、老齢で儀式の遂行に難があったのか、息子を立てようとしたのか、チンギスの名を奉ったのは息子であった。ただ、この後宗教的な立場でテムジン一家を凌ごうとする態度が出て、殺されることになる。

### 4.2　オノン河源

即位した場所は、自身がモンゴル部族のカンとなった場所でもあるキヤト氏族の聖地、オノン河のゴルゴナク・ジュブル（川畔）であろう。テムジンが幼い頃を過ごした場所にも近い。その位置は、オノン河にホルホ河が合流する地点 48.59N110.67E と想像する（図 5）。

### 4.3　家族の思い

この時、母ホエルンは健在だった。60 歳くらいか。10 年前、モンゴル部族のカンになった時もうれしかっただろうが、息子はそれを遙かに超えた存在になった。夫イェスゲイを失ってからのことが思い出されて、胸に迫ってくるものがあっただろう。ホエルンの弟のキンキヤダイは若い頃からずっとテムジンと行動を共にしていた。妻のボルテの家は裕福だったが、父の抵抗を押して貧しかったテムジンと結婚した。4 人の息子と 5 人の娘の母として暖かく豊かな雰囲気を醸し出し、テムジン家の魅力を一層高めた功労者であった。妻の父デイ・セチェンは部族内の情報をテムジンに

伝えるなどして助けていたが、この頃の情報が乏しいところを見ると、恐らく亡くなっていたのだろう。彼のボスクル氏はコンギラト部族の中では主流ではなかったが、コンギラト部族といえばボスクル氏になった。ボルテの結婚に父デイ・セチェンが渋るのを、ボルテの弟のアルチは勧めたという。彼もテムジンに従って戦っていた。まさかこんなことになるとは思わず、感慨ひとしおだっただろう。

逆に、父系の親族で残っていたのは、父の長兄モンゲトゥ・キヤンの系統だけだったようだ。父の従兄弟アルタンも、従兄弟のクチャルも初めの頃こそテムジンに従っていたが、反抗して敵となり、捕まって処分されたらしい。叔父のダリダイも一時敵に回っていたが、親征録によれば土下座して許しを請い来帰したという。お情けでなんとか生かされたのだろう。甥の力を信じられなかった自分を悔やんでいたであろう。

## 5　ブイルク・カンのナイマン部族攻撃

――クリルタイが終わって間もなく、チンギス・カンの軍隊はブイルクを襲った。突然の襲来だったのでブイルクは気づかなかった。ウルク・タクのソゴク水で猟をしていた彼をそこで捕らえ、領地と財産を奪った。グチュルクとクトアはイルティシュ河方面に逃げた。――

### 5.1　戦いの様相と結果

集史の記事によれば、チンギス・カンの攻撃はブイルクにとって唐突だったようだ。多分、夏の初め頃、通常なら戦いを起こさない時期に、ハンガイ山脈の北回りは勿論、東回りからも攻め込んだのだろう。昨年西夏から奪ったラクダが大いに役立ったと思われる。こんな時期に攻撃されるとはブイルクは想像もしていなかったので、逃げる気力さえ失い捕らえられたようだ。グチュルクとトクトアはアルタイ山脈を越え、ウルング湖方面に逃げたようだ。

### 5.2　秘史の創作部分

158 節には、オン・カンと共にアルタイ山脈を越えてブイルク軍を追い、キジル・バシ湖で極め尽くしたとある。これは、1199 年のブイルク・カン攻撃、今回の作戦、更に後の 1208 年にトクトア達を破った事実を取り混ぜて創作している。

### 5.3　戦いの結果

この戦いをもって北方高原地帯における遊牧部族の争いは終了し、チンギス・カンの支配権が確立した。この後数年間はトクトア達の追討、北方諸民族の来帰を促すことなどをやっていたが、最も重要だったのは、旧メルキト領、旧ナイマン領を部下達に与えてモンゴル化を進めることであっただろう。即ち内部固めの時期であった。金国にも状況を報告し、従来と同じように表面上は服従して貢納したようだ。だが、元史にはこの 1206 年に、早くも金国を攻撃して先祖の仇を討つ事を考えたが軽動しなかったとある。それからすれば、この間、西夏への攻撃を行っていたのは、城郭

都市を持つ農耕地帯に対する攻撃方法を学ぶ側面が大きかったようである。

了

## 3. 参考文献

＜史料＞

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房，東京
：村上正二(1970)「モンゴル秘史１，２，３」平凡社，東京
『集史』:『史集』(1983)，商務印書館，北京
：ドーソン著，佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史 1」平凡社，東京
『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局，北京
『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注，文求堂蔵版(1910)，国立国会図書館近代ﾃﾞｼﾞﾀﾙﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ

＜参考資料＞

(1) http://mongolnews.blog133.fc2.com/blog-entry-917.html?sp

以上

改訂履歴

2020 年 11 月 23 日　初版